

厚木市民文化祭

県央史談会

上荻野地区史跡めぐり

令和7年（2025）11月3日（月・祝）

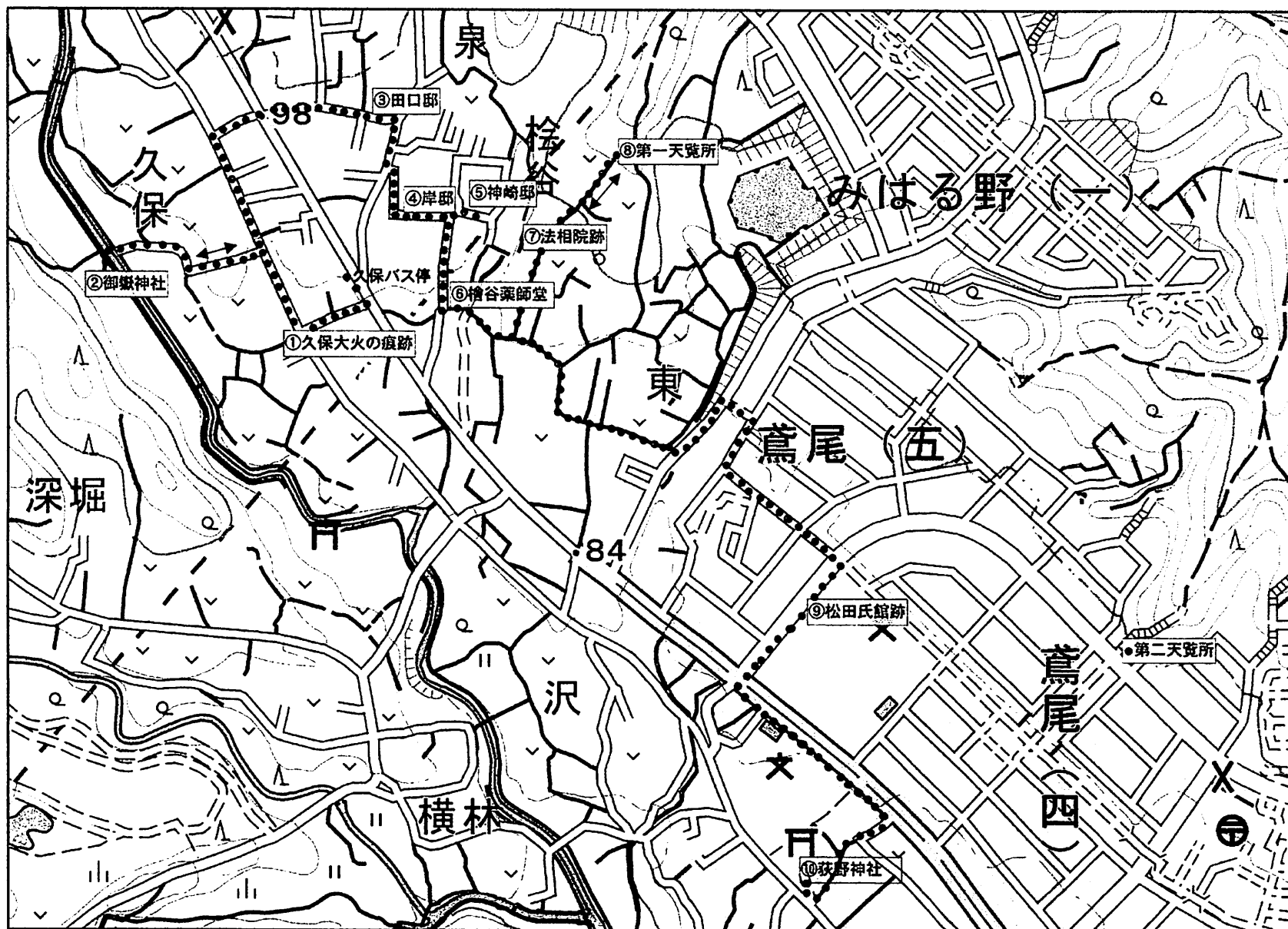
現地説明・資料作成

荻野の歴史を学ぶ会

上荻野（宮本地区）ふれあいウォーキングマップ

- ⑩久保バス停
↓ 0.10km
- ①久保大火の痕跡
↓ 0.34km
- ②御嶽神社
↓ 0.55km
- ③田口邸
↓ 0.20km
- ④岸邸 WC
↓ 0.10km
- ⑤神崎邸
↓ 0.13km
- ⑥檜谷薬師堂
↓ 0.20km
- ⑦法相院跡
↓ 0.10km
- ⑧第一天覧所
↓ 1.00km
- ⑨松田氏館跡
↓ 0.50km
- ⑩荻野神社 WC

総距離：3.22km



上荻野宮本地区

上荻野地区は面積が大きく地区数も多いことから便宜的に大上地区と宮本地区に分けています。かつて小学校の運動会の最後を飾る地区対抗リレーの地区の一つでした。

今回探訪するのは宮本地区の中の久保・泉・檜谷・東の区域です。

荻野の地域区分と自治会（厚木市合併時）

大字	地区名	自治会名	小字
上荻野	大上	用野	用野自治会 用野 狩野
		北部	北部自治会 杵掛 北久保
		丸打	丸打自治会 丸山 打越
		田尻	田尻自治会 田尻
		浅後	浅後自治会 浅間森 後谷
		峯柄	峰柄沢自治会 峯 柄沢
	上	荒井	荒井自治会 荒井
		真弓	真弓自治会 真弓
		清源	清源自治会 清田谷 源氏河原 王子原
		久保	久保自治会 久保
		泉	泉自治会 泉 原谷
		檜谷	檜谷自治会 檜谷
	宮本	東	東自治会 東
		宮郷	宮郷自治会 沢 横林 深堀
中荻野	馬場	馬場自治会	馬場 椎現堂 銅座金山
	本郷	本郷自治会	本郷
	公所	公所自治会	公所
下荻野	升割	升割自治会	升悪
	子中	子中自治会	子合 中金井
	新宿	新宿自治会	新宿 宿原

関連年表

時代	西暦	和暦	事項	備考
戦国	1500年代		⑦法相院開創（松石寺5世 洞庵）	
	1590	天正18	⑩小田原落城、北条氏滅亡	松田康長討死
江戸	1595	文禄4	⑩松田直長、家康に勤仕	屋鋪跡
	1686	貞享3	⑥檜谷薬師如来（像内納入経奥書）	
	1687	貞享4	⑩石神社本殿再造	
明治	1870	明治3	⑩石神社を荻野神社に改称	
	1870	明治3	⑦法相院廃寺	
	1881	明治14	⑧明治天皇行幸 近衛兵対抗運動天覧	
	1882	明治15	③田口松平「論文抜録」	
	1883	明治16	③⑤愛甲講学会開催	
	1885	明治18	⑤養蚕伝習所「相愛社」設立	
	1887	明治20	⑩荻野小学校創立	
	1889	明治22	①上荻野久保大火	焼失戸数13戸
	1891	明治24	④岸邸建造	
	1893	明治26	⑤神崎正蔵荻野村第二代村長	
大正	1897	明治30	⑦赤痢大流行、伝染病隔離病棟	死者157名
	1915	大正4	⑧明治天皇天覧碑造立	
	1925	大正14	②御嶽神社現在地へ移転	
昭和	1954	昭和29	⑩戦没者慰霊碑	
	1956	昭和31	④厚木市に合併（村長 岸錦）	
	1988	昭和63	⑩平和の碑	

① 上荻野久保大火の痕跡

明治時代以降、荻野地域は4度の大火に見舞われました。このうち明治22年（1889）の上荻野久保の火災は戸数13戸、棟数26棟が焼失する大火でした。

現在、旧道（津久井道）の傍に幹の内側が火炎で焼かれ空洞になったモチの木が残存しています。130年以上前の大火の生き証人として、道の反対側にある石像物とともに地域の歴史を伝えています。



（参考）荻野の大火

明治22年（1889） 上荻野久保大火

焼失戸数13戸、焼失棟数26棟

明治24年（1891） 下荻野新宿大火

大正15年（1926） 上荻野大火

昭和 4年（1929） 中荻野本郷大火

焼失戸数23戸、焼失棟数55棟

焼失戸数28戸、焼失棟数50棟

焼失戸数37戸、焼失棟数76棟

出典：『荻野消防史』

② 御嶽神社

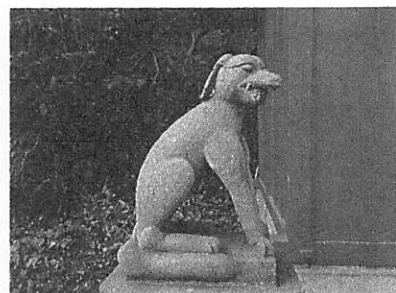
久保御嶽神社と御嶽講

久保御嶽神社の創設期と場所は不明であるが、大正14年に現在の久保山の一部を講中共有で取得し、オオカミの石像ともども建立された。その後昭和28年の宗教法人法成立と同時に宗教法人となり現在も責任役員3名、講中16戸体制で運営されている。

昭和40年代までは久保全戸と泉の一部が講中であったが泉の世話人が亡くなってから講員が減り、久保だけの運営になっていった。

講員は毎年順番に2名が3月末に武州御嶽神社へ代参し一年間拝借している大口真神社のお札を返却し新たにお札を拝借して帰るく習わしが続いている。

今でも“おみたけさん”は地域にしっかり根ざし、三月末には講中によって参道の道普請、石段、社の清掃のあと農作物が雹の被害に遭わないことを願う雹祭りがとり行われる。武州御嶽神社へは毎年世話人が代参し、



御師へお札の返却と新たなお札を受け取って、四月八日には形式的ではあるが関係者だけで神職を招いて祭礼がとり行われている。後日御嶽神社の盗難除けと火難除けのお札、オオカミのお札、太占（作凶占い）が講中に配られる。

武蔵御嶽神社と御嶽溝

武蔵御嶽神社は秩父三峰神社とともに関東地方の二大聖地として人気があり、①家内安全、商売繁盛、五穀豊穡など庶民の生活を豊かにする蔵王権現、②強い運をもたらす神として奥宮に祀られている日本武尊、③火災・盗難・病気など様々な災いから人々をお守りする大日真神（オオカミ）の三社のご神徳から成り立っていて、江戸中頃から庶民が講を組織し、参拝やお札の拝札で運営されてきた。講は昔の字（あざ）などを単位として、講元を中心に世話人といわれる会計庶務などを担当する役員と講員数名から数十名で組織されている。運営は毎年講員から少しずつ積み立て（講金）をし、そして講員の中から籤（くじ）などで皆を代表して神社に参拝する代参人を選んだ。



久保御嶽溝の成立時期

久保講中の代参の記録については昭和期以前は消失して残っていないが御師鈴木家に残されている史料の中に①荻野村覚帳（寛政五年十一月）、②相州上荻野帳、（嘉永七年七月吉日）いわゆる檀家帳といわれる記録があることがわかったので、解読し久保御嶽講の成り立ちを追ってみたところ、鈴木家（当時は鈴木伊織家）は上荻野全域（杓掛から荻野神社のある宮前）を檀家としていたことが分かった。ここには上荻野村の檀家が小字名十五地区に分けて、名主、講員など総勢 221 人の名が書かれている。記録から見る限り寛政五年（1794）には久保の23戸にお札が配られ、このころに久保御嶽講が始まったと考えられる。50年後の嘉永7年（1854）にはきめ細かな普及活動の成果で二十四地区に分けて 281 戸が記載されている。

③ 田口邸

上荻野 9 3 4 番地の田口家の創建は定かでないが、当家の位牌に「先祖 随心院殿柏庭（俗名 田口丹後守 源 重英 文永 4 丁卯年（1267 年）正月 2 8 日）」とあります。これは、鎌倉時代の中期の頃です。鎌倉時代は地方の役人に守護・地頭を任命し地方を治めていました。当家のご先祖は荻野に伝わる源氏伝説と関係があるのかもしれませんが。しかし 2 代目の戒名は、寛永 5 年戊辰（1628 年）10 月 2 8 日没（江戸時代初期の家光の頃）の記録があります。江戸時代には名主職であったろうと思われます。当家は、少なくとも 400 年前から地方の役人を任命されていたと推定されます。



当家の特徴

- 1 現在の主屋は、明治40年に造られた。
- 2 当時火災に遭い、半原から移築された。

一部移築の痕跡がある。

○当時は、火災になるとすぐに新築する場合は移築をしていたようです。

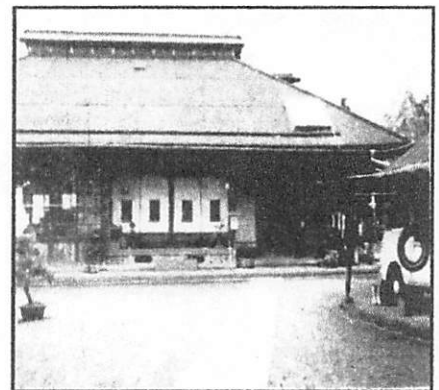
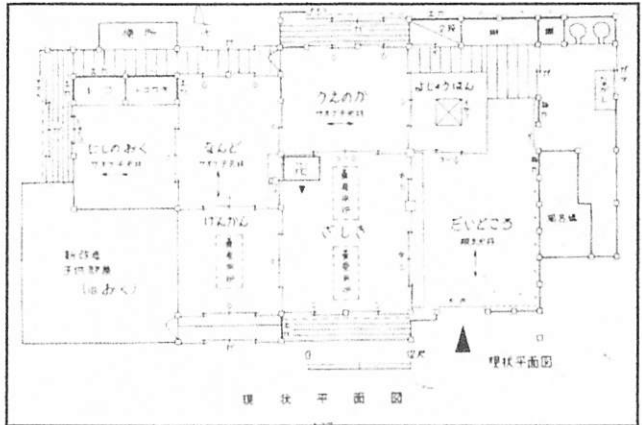
理由：木材がすぐに使えない。木材は、伐採して5年～10年ほど乾燥させて使用する（カビが生えたり、材木の狂いが生じるのを防ぐ）ので移築材を使用していた。

○新築をする場合10年位前から準備、また50年前から杉、檜を植林をしていたようです。

- 3 愛川の山十郎と同じに造りです。半原の大工が作ったと云い伝えられている。

○当家は、築後改築を繰り返しているのも重要文化財にならない（当家談）。

- 4 板屋根（ダイタ）に明治45年頃トタンをかぶせた。
- 5 土間前面の板壁檼の一枚板。
- 6 土間妻側の板壁は、杉の一枚板である。
- 7 写真は、昭和30年代に撮影



醤油醸造

当家で醤油製造を始めた時期は定かではありませんが江戸の時代と思われます。厚木市史の資料では、「慶応4年酒造・濁酒造—醤油造造高・一時冥加金員数取調書」の記録があります。今後の調査に待ちます。

醤油造りの始まりは、自給自足の時代では、自家製造が中心でした。原料の麦、大豆と塩で「もろみ」を1年間寝かし、「もろみ」から醤油の液体を分離して使用していたかもしれない。大量の消費時代にもない工場生産となり、慶応年代の頃、荻野では7年件の製造所があり田口家はその一軒です。しかし大正期にお



上荻野の田中孝司さん



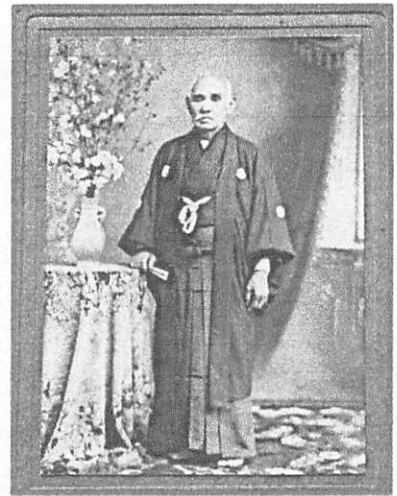
出典：農協あつぎ
昭和55年6月5日発行

いては、自家用製造の比率が非常に多くなり、「しょうゆしぼり屋」が各家庭を回って醤油を搾り作業を行いました。(荻野の歴史 p 157 を参照)

田口松平

松平は、天保8年(1837)生れ、父松兵衛が慶応2年に没、醤油製造を継ぎました。

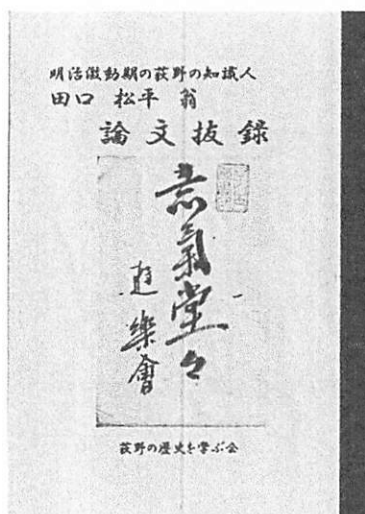
「荻野の歴史を学ぶ会」で田口家の古文書調査を実施した際に、明治15年第6月「論文抜録巻之壱」と題された冊子が発見されました。これには『明六雑誌』などから学んだ「教養之論」「人材之論」ほか「信長論」「論富国ノ原因」「史論」な



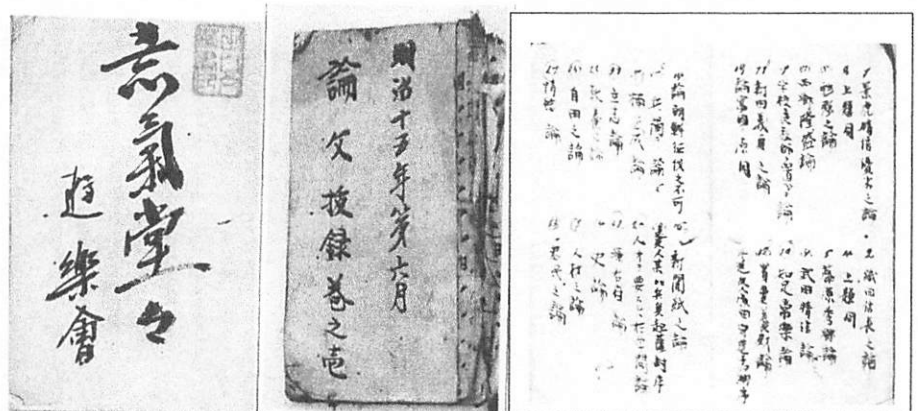
ど28題が墨書で収録されています。

松平は明治16年に荻野新宿で開講された愛甲講学会に参加し、同17年の減租嘆願書さらに翌年の醤油課税法改正の建白書に賛同し、荻野の自由民権運動に活動した人物です。

なお、荻野神社に松原亭真近の狂歌碑を父・田口松兵衛門(慶応2年(1866年)8月晩日没)が文久2年壬戌秋に建立しています(現在は破棄)。



平成30年刊行



明治15年論文抜録原文

★解説

17 兵禍ヲ論

夫レ国ノ災ハ兵禍ヨリ重キ者ナシ何トナレバ則チ戦ノ時ハ無罪ヲ殺シ村里ヲ却カシ良田之ガ為ニ荒蕪トナリ民者之カ為ニ貧窶ト為ラシム是レ国家衰凋スル根基ナリ或人曰ク戦ハ得失アル者ナリト其レ然リ豈夫然ランヤ仮令ヒ失アリト雖モ得アルコトナシ或人又曰謂フ泰西

ノ歴史ヲ視ヨ欧州ノ文化ハ拿破侖ノ騷乱ニ基シ合衆国ノ開明ハ革命ノ戦闘ニ始マリ我国ノ文明モ亦戊辰ノ改革ニ權輿スト是レ兵ノ得アル所以ナリト余之ニ答ヘテ曰ク君ノ言ノ如クンハ兵モ亦得アリト雖トモ得テ以テ失ヲ償フニ足ラス

巨万ノ財ヲ徒費シ貴重ノ人命ヲシテ非命ニ死セシメ或ハ妻ヲシテ夫ヲ失ハシメ或ハ弟ヲシテ其兄ヲ失ハシメ以テ糊口迷フモノ渺カラス是レ兵ノ失アル所ニシテ余ノ君ニ服従セサル所以ナリ古人曰ク兵ハ凶器ナリト信ナル哉

★書き下し文

17 兵禍を論ず

夫れ国の災は兵禍より重き者なし。何となれば則ち戦の時は無罪を殺し、村里を却かし、良田之が為に荒蕪となり、民は之が為に貧窶と為らしむ。是れ国家衰凋する根基なり。或人曰く戦は得失ある者なりと。其れ然り、豈夫然らんや。仮令い失ありと雖も得あることなし。或人又曰、謂う、泰西

の歴史を視よ。欧州の文化は拿破侖の騷乱に基し、合衆国の開明は革命の戦闘に始まり、我国の文明も亦戊辰の改革に權輿すと。是れ兵の得ある所以なりと。余之に答へて曰く、君の言の如くんば兵も亦得ありと雖も得で以て失を償うに足らず。

巨万の財を徒費し貴重の人命をして非命に死せしめ、或は妻をして夫を失わしめ、或は弟をして其兄を失わしめ、以て糊口迷うモノの渺からず。是れ兵の失ある所にして余の君に服従せざる所以なり。古人曰く兵は凶器なりと。信なる哉。

★注記

兵禍 戦争によつて生じるわざわい。戦禍。却かす 没却する。なくす。のぞく。荒蕪 土地が荒れて、雑草の茂るがままになつてゐること。非常に貧しいこと。また、貧乏をしてやつれること。勢いを失ふこと。ねもと。おおもと。根本。そもそも。いったい。さて。求める。所望する。願う。泰西 西洋。拿破侖 革命期のフランスの軍人・政治家である。ナポレオン一世としてフランス帝国の皇帝に即位した(1804年・1804年、1805年)。フランス革命後の混乱を收拾し、ナポレオン戦争を引き起こしてヨーロッパ大陸の大半を勢力下に置いたが、最終的には敗北して失脚した。開明 開化。革命の戦闘 1776年 アメリカ独立戦争。權輿 物事の始まり。事の起こり。発端。軍事。戦い。財 金。金銭。価値があるもの。徒費 浪費。非命 思いがけない災難で死ぬこと。横死。糊口迷ふ 生活に窮する。服従 他の意志や命令に従うこと。兵は凶器なり 武器は人を殺傷する危険で不吉な道具である。戦争は、慎重にしなければならぬ。信 眞実。感動の意味を表す。なあ。

★解説文

25 史論

教育進マザレバ人民ノ智識開ケズ人民ノ智識開ケサレバ眞正理論ヲ唱ヘ確實ノ事業ヲ興スモ之ヲ實際ニ施シ其効ヲ奏スルコトヲ得ベカラス故ニ余謂ヘラク本邦今日ノ急務ハ教育ナリ而シテ教育ノ要慣習相承クル所ノ卑屈ヲ脱セシムルニ在リ然リ而シテ卑屈ヲ脱セシメント

欲スルヤ内外古今史傳ニ涉リ外国草昧の古ヨリ轉口(變遷)沿革以テ今日ノ文明ニ至リシト内国々初ノ我人民ノ鼻祖ハ如何ナル者ニシテ何等ノ産業ヲナシ何等ノ苦樂ヲ受ケタリシヲ幾多ノ變遷ヨリ以テ今日ノ風俗ニ至リシコトヲ知ラシムレバ自ラ奮發興起ノ志ヲ生ジ之ヲ挽回シテ自由不羈ノ良民タラント欲スルノ念ヲ斷ザルニ至ルベシ是ノ故ニ古來國郡都府ノ沿革政教學術ノ隆替財産貿易ノ盛衰人情風俗ノ變遷悉ク詳ニ記載スル所ノ國史ヲ讀マシムルヲ以テ要トナスナリ今敢此ノ論ヲ作ルモ事情ニ於テ止ムコトヲ得ザレバナリ。

★書き下し文

25 史論

教育進まざれば人民の智識開けず、人民の智識開けざれば眞正理論を唱へ確實の事業を興すも、之を實際に施し其効を奏することを得べからず。故に余謂えらく、本邦今日の急務は教育なり。而して教育の要慣習相承くる所の卑屈を脱せしむるに在り。然り而して卑屈を脱せしめんと

欲するや。内外古今史伝に涉り、外国草昧の古より轉變沿革以て今日の文明に至りしと、内国最初の我人民の鼻祖は如何なる者にして、何等の産業をなし、何等の苦樂を受けたりを、幾多の變遷より以て今日の風俗に至りしことを知らしむれば、自ら奮發興起の志を生じ、之を挽回し自由不羈の良民たらんと欲するの念を斷ざるに至るべし。是の故に古來國郡都府の沿革、政教學術の隆替、財産貿易の盛衰、人情風俗の變遷悉く詳に記載する所の國史を讀ましむるを以て要となすなり。今敢て此の論を作るも事情に於て止むことを得ざればなり。

★注記

進む 盛んになる。進歩・進展する。
開く ひらく。ひろがる。ひろげる。
眞正 眞実で正しいようす。眞正銘かなめ。大切なところ。しめぐり。
慣習 ある社会で古くから受け継がれている生活の上のなわし。しきたり。
相 『動詞の前につけ、語調を強めるのに使う語。』
承くる あとを継ぐ。受け継ぐ。
卑屈 いじけて、必要以上に自分をいやしめること。
然り而して そこで、そして。
『助動詞』なさいな。
渉る 各方面で広く見聞する。研究する。
草昧 まだ世が開けきらず、秩序が整っていないこと。天地の始まり。
轉變 次々と変わること。
沿革 始まりから今日までの移り変わり。
國初 國が成立したはじめ。
鼻祖 最初に物事を始めた人。元祖(がんそ)。始祖。
幾多 何ほど。多数。
風俗 ある時代やある社会における、生活上の習わしやしきたり。風習。
自 自然に。ひとりでに。
奮發 氣力を奮い起こすこと。
興起 勇ましく立ち上がること。
自由不羈 何者にも縛られず、自由なこと。思い。氣持ち。心の中を考え。念。当然の意を表す。くして当然だ。くのはずだ。
政教 政治と宗教。政治と教育。
隆替 栄えたり衰えたりすること。盛衰。つぶさに。細かい点まで詳しく。作る 書物などを書く。
く於て くの点で

④ 古民家岸邸 (詳細は別添パンフレット参照)

明治24年(1891年)に建造された歴史的建物で厚木市の指定有形文化財です。

平成10年(1998年)に岸重郎平氏から厚木市に寄付され、当時の生活様式を色濃く伝える「近代和風」の貴重な文化遺産として平成11年(1999年)から一般公開されています。主屋は木造2階建て寄棟造瓦葺で部屋は全部で15室、敷地面積は約520坪と広大です。建物に使用されている樺や松などの木材の質が極めて高い上に仕上げが入念で、職人が手をかけて作った凝った意匠も随所に見られ、建築当時の時代の先端的な様式を併せ持つことがわかります。創建後、2回の増改築が行われており、明治、大正、昭和期それぞれの生活、建築技術、流行などの時代の変化を垣間見ることもできます。



屋敷入口の重厚な門は、明治19年(1886)に建てられた「薬医門」という様式です。本柱が門の中央線上から前方にずれており、面側の軒を長くするように作られています。

先世の岸錦氏は戦中、戦後の2度萩野村村長を勤め、2度目は昭和31年(1956)に萩野村が厚木市に合併した時の萩野村最後の村長でした。

⑤ 神崎邸

神崎 正蔵 (かんざき・しょうぞう) (1845~1914)

弘化2年(1845)上萩野村で生まれる。明治11年(1878)英国宣教師ウィリアム・ライトに上萩野での説教時に面会。明治14年(1881)2月上萩野戸長、同年6月厚木の民権結社「共話会」に有志者として参加。明治15年(1882)民権結社「相愛社」創立の幹事として神崎正兵衛と共に参加する。明治16年(1883)「講学会」創立に議員として参加し愛甲郡自由党賛成員となる。明治17年(1884)の地租軽減運動で



神崎正蔵

は、総代人となり署名運動に奔走した。明治22年(1889)には自宅敷地に養蚕伝習所(相愛社)を設け、その社長として実業の世界でも活躍した。その後、郡会議長や第2代荻野村長も務めた。

大正3年(1914)、69歳で没。

相愛社

明治18年(1885)、神崎正蔵、難波富雄らを中心に荻野村で設立された養蚕伝習結社。明治22年(1889)神崎正蔵は自ら社長となり、屋敷内に養蚕試験室、伝習所を建設し、西ヶ原蚕業講習所出身の池田孫右衛門、埼玉県人・関谷重次郎を教師に招き養蚕の普及指導にあたった。



【神奈川県相模国愛甲郡荻野村上荻野 相愛社長 神崎正蔵宅】

⑥ 檜谷薬師堂

薬師如来は身心の健康を守ってくれる仏として、病氣治癒、健康長寿、安産祈願、現世利益などのご利益があることから、地域では「ヤクシサン」として尊崇されてきました。

檜谷公民館と合築の建物内に薬師如来像、脇侍の日光・月光菩薩立像、眷属の十二神将が安置され、檜谷集落の12軒からなる檜谷講中により管理されてきましたが、平成5年12月に薬師如来像ほか一揃いが檜谷講中からあつぎ郷土博物館へ寄贈され、現在跡地には檜谷講中により沿革を記した碑が建てられています。





薬師三尊と十二神将
(あつぎ郷土博物館にて展示中)

元神奈川県立歴史博物館長 薄井和男 先生

あつぎ郷土博物館での講演資料より

①木造薬師如来坐像

像高 25.0 cm 膝張 20.0 cm 総高 70.0 cm

寄木、割矧 (は) ぎ造り 玉眼嵌 (かん) 入、漆箔

台座裏墨書 松谷薬師如来再興 (修理の意) 村中 享保元年(1716)10月13日

像内納入経奥書 薬師瑠璃光如来 本願功德経終 貞享3年(1687)

②木造日光・月光菩薩立像

像高 25.0 cm ・ 25.5 cm

台座裏墨書 松谷村 奉修造

※制作の時期 薬師三尊は鎌倉時代の巨匠運慶を祖と仰ぐ近世鎌倉仏師の作と考えてよい。作風的に江戸前期の造立と考え貞享3年頃が想定され、中世以来の堅実な作風をそなえた秀作と言える。

③木造十二神将立像

一杓造、彫眼、彩色。像の全体を一木より彫出する。各像とも形姿よくまとまる十二軀の着装や形態は鎌倉仏師作に似る。作風的には、薬師三尊像との違いが感じられ、制作時期も異なり江戸時代後期の可能性が考えられる。

松谷薬師堂の仏はあつぎ郷土博物館に収蔵されている。

⑦ 法相院跡

上荻野には松石寺を本寺とするの4ヶ所の末寺（子院）がありました（全應院・嶺洞院・源養院・法相院、いずれも廃寺）。蔦尾山麓にあった法相院はその一つで、寺号は玉応山、本尊は釈迦如来。開山は本寺松石寺5世の洞庵（弘治3年（1557）卒）。元治元年（1864）の人別書上帳には僧3人、下男1人と記され、残存する石造物などから推定するとかなり広い寺域を有していたようです。

他の子院とともに明治初期に廃寺となりましたが、明治中頃まで建物の一部が残存しており、当時多発した赤痢やジフテリア、腸チフスなどの伝染病（感染症）の臨時隔離病舎として使われました。

（参考）

●厚木市医師会百周年記念誌第3章より（抜粋）

2「伝染病隔離病舎について」

（1）林晃遺稿抄から

下荻野の林医院の先代晃先生が昭和37年頃に書かれた遺稿の中に「旧愛甲郡内町村隔離病舎の出来るまで」と題された原稿がある。未完ではあるが、大変興味深い話であるから転載して、当時の様子を見て見よう。

「愛甲郡内町村隔離病舎の出来るまで」

明治15年前後は「コレラ」病の流行あり。その後疫病と云うと今云う「腸チフス」「パラチフス」が時々発生した。25年頃には今云う赤痢病が大流行、あちこちの町村で患者が続出し、先から先へと流行した。

何が原因やら皆目知らず、ただ戦々恐々として、患家には近寄らぬが一番と云うことで、患者発生の場合には医師は直ちに町村役場に報告することとなった。役場では衛生係が患家の周囲に石灰を散布し、殊に便所、勝手許、排水溜め周囲を消毒した。

患家の入口には半紙を4、5枚つなぎ、筆太に「赤痢病患者あり交通を遮断す」と書いて最も見やすい所へ貼附した。そのため、隣家の人も近寄らず、親類の人も、来ても家に入らず外で見舞うありさま。医者への薬は組合の連中が交代に医者の許よりこれを運んだ。患者の家の周囲には出入りしない様縄張りをしてあるので、内へは入らず外より差し入れしたものだ。

農家で患者が発生すると養蚕時期でも繭も売れず、公然畑へも行けぬ。麦作の収穫時期などは、刈り取り、田んぼの手入れなどまで近所の世話になる始末。

そんな騒ぎをしたため、家族に下痢患者が出来ると思われ、密かに買薬などで様子を見る。その内病人が殖えて一人が二人になると困り抜いて医者にかかると思われ、先から先へと伝染する。赤痢と決定すれば、医者は直接役場へ報告、前記の様な大騒ぎとなり、やれ不消化物を食うな、手を洗え、石灰酸水で消毒せよ、発生した近所の小學校生徒は學校を休め、患家の子供は1週間休校させる。

誰云うとなく未熟の青柿を食うと赤痢になると云うので、村議や役場の予防員などは白衣を着、長竿を担いで廻り、青柿を叩き落として捨てさせたりした。柿落としの連中の中でも、こっそり熟したのを懐中に入れ持ち帰った人もあった（古老の話）。

小学生も患者の家の前は口をふさぎ、息を吞んで駆け抜けたり、廻り道をしたりした。荻野も流行では有名で主に馬場、東部落等に多数患者が発生した。その当時上荻野字中の橋に開業の石井道三氏が治療を担当して居られた。

伝染病は警察の管轄であったので、患者の自宅治療は禁ぜられ、一定の場所へ隔離せよと云う通達が来た。役場当局も急に病室を建てることも出来ず、折りよく東部落の山の手に宝蔵院※と云う無住の寺があった。これを借りて病舎とし、伝染病患者を収容することとなり、看護婦を雇い入れ、小使を雇って雑事を受け持たせ、役場では専任の吏員を定め、どうやら形が整った。この新病舎では大分多数の患者を収容した。何しろ現在の治療法と異なり、今より67、8年前のことゆえ、これと云う特効薬もなし、死亡率も大であった。 ※法相院の間違ひ

石井主治医も一人では手が足りず、折りよく煤ヶ谷村出身の守屋と云う医者を頼み、補助医としたが、あまりに死亡が多かったので、夜に紛れて山越しに実家へ帰ってしまった。この人は後に軍医となり、中佐にまで昇進したとのこと。

その内伝染病で死亡した者は土葬は禁止となり、火葬せよ云う命令が下った。その当時は埋葬のみで、火葬などほとんどしなかった。火葬場がある訳ではなし、人里近くでは出来ぬことゆえ、なるべく村境の部落より遠い山が決定した。場所は、宝蔵院の横に蔦尾山に登る道あり、その尾根続き、字原谷の山頂、中津村八菅山との境に俗称「まんのんぼう」を火葬場とした。

下荻野の火葬場は字岩戸と云うて小鮎村との境、今はゴルフ場となり、大きな松が1本ある付近だ。

中荻野には2ヶ所あり、1ヶ所は蔦尾山登山口、天覧所の1丁程先の山中。他の1ヶ所は中荻野本郷の西側字権現堂の奥、小鮎村境に近き山中にあった。

志賀博士が1897年に赤痢菌を発見されてから、この病気は柿や果物などでは伝染せず、蠅の媒介や便所の周囲の不潔場所より色々の条件により伝染することが判明した。

以上の理由で患者の自宅治療は不潔物の処理や看病が完全に出来ずまた伝染の点から見ても頗る危険である。各町村で隔離病舎を新築することになった。

荻野村では、小学校本校舎裏手の高台。小鮎村では小学校の南側の高台。煤ヶ谷村では金廻入口の手前右側の高台。南毛利村では中長谷の高台。三田村等5ヶ村組合では神奈中バス松蓮寺停留所と麴屋前停留所の略中央東側の小高き場所。中津村では小学校裏手。厚木町では松原土手の中央で以前煉瓦を焼いていた跡に夫々建築された。依知村では古老に聞いてみても、確かにあったが、場所は判然としないとのこと

かくて隔離病舎が出来、同時に種々の設備も出来たので治療も看護も自宅以上に出来る様になった。しかし、各村の病舎も人家より相当離れた原の中や山の上なので、あまり人が近ずかぬ。医者が往診するにも不便だ。患家でも自宅なら都合が良いが前述の様な不便な場所では家人が付き添いに行かねばならぬ。買い物、薬の運搬にも、親類の人が、組合の人達が交代に連絡員として往復した。

こんな訳で伝染病が発生すると報告を拒否して実に困った。しかも管轄が警察署なので隠蔽問題などが起こったこともあった。

赤痢はこんな訳で大分少なくなった。これに代わって、腸チフス、パラチフスが流行し出した。赤痢と異なり経過が長引くので時とすると病舎が満員となることもあった。

大正4年の春頃大流行した。殊に中津村下熊坂部落では道路に並行して灌漑用水堀が有るので、部落の人達はこれを利用して衣服の洗濯、時には食器を洗う。同じ様な地形で、睦合村妻田にも流行した。上流で伝染病が発生すると患者が発生する、と、病人の使用した衣類または汚れた物を用水堀で洗う。下流では（遺稿はここで終わっている）。

●「荻野事務報告書」より

明治30年 赤痢154人、ジフテリア3人、腸チフス1人 死者48人

8月5日神崎正兵衛、神崎正蔵、三橋泰次郎、斎藤作次郎、野口専蔵、難波惣平、石井道三を伝染病予防委員二に選任ス

●「愛甲郡制誌」より

伝染病について大正14年発行の『愛甲郡制誌』に次のような記述がある。

近來流行病の襲來すること頻々で腸チブス、ヂフテリア、赤痢の如きは年として発生せざる事なき状態で頗る寒心に堪へざるものがある併しながら近時衛生思想の向上と予防注射又は接種等の如き防疫方法の進歩とに因って是等の流行病患者の発生が年々減少する傾向である。

今左に従来最も猖獗を極めた赤痢に就て大略記述する該病は明治26年隣接中郡の一部に数百名の患者を出して以来流行区域を拡大して30年より33年に亘って頗る猖獗を極めた本郡に於て最も烈しかったのは明治32年であつて同年1月より8月31日迄の患者数186名に達し内死亡者39名あつたが他は悉く全治した此の際要した経費支出額は合計実に10,692円の巨額に上った近時に至って患者数著しく減少し大正12年末に於て17名となり内8名死亡したのである。

また、同書には、荻野が最初となる伝染病隔離病舎について次のような記述がある。

伝染病隔離病舎は荻野村に於て明治20年4月設立されたのが始めて順次郡内各町村その設立を見るに至つた。従来は設備不完全のものが大分あつたけれども近時追々と改善の途を講究して着々実行しつつあるのである。就中本郡に於て最も完備せる病舎は依知村、中津村、高峯村の3ヶ村組合立隔離病舎で大正11年7月之を建設したものである。

そして、大正12年末現在の町村毎の隔離病舎数の記載もある。抜粋すると、（以下略）

⑧ 第一天覧所 ～近衛兵対抗運動天覧～

明治天皇行幸（近衛兵対抗運動天覧）

明治14年（1881）4月28日～31日、近衛兵の春季演習統監を目的として明治天皇が厚木地方を行幸されました。

この演習は4月中旬より開始され、埼玉県南部から多摩地方に進み、厚木市西部一帯が最後の決戦場として終結をみるという想定に基づいて実施。演習人員は近衛歩兵第二連隊ほか将校、下士官、兵員含め2597名が参加。これが南北両軍に分かれ、29日には荻野鳶尾山麓を中心に衝突し、南軍が敗れて津古久峠のあたりまで退却、30日には本隊の増援を得た南軍が逆襲に転じ北軍を撃退して終了。

この時の行在所は妻田の永野邸。29日には乗馬にて上荻野第一天覧所に向われ、ついで中荻野の第二展覧所に移られ全軍の演習を、翌30日は早朝に永野邸を出発、払暁戦から始まり南軍の勝利に帰した演習の最後の状況を愛名の高松山（御行山）から天覧。

（繪錦横枚三）圖之練調大動運抗對年四十治明



天覧錦絵

出典：『妻田行幸（紀元二千六百記念）』

天覧記念碑

大正4年（1915）、御大典記念の一環として地元青年会が建立。

第一天覧所碑の題字は荻野村長三橋泰次郎、第二展覽所は荻野小学校長加藤政福が執筆。



第一展覽所



第二展覽所

「荻野事務報告書大正編」

天覧碑 大正4年11月10日村内2ヶ所ニ建碑ス、明治天皇近衛兵対抗運動御統監ノ為メ本村へ行幸アラセラレ御野立所ニ充テラレタル地ヲ永遠ニ記念スル為メ。11月吉辰ノ日ヲ占シ御即位ノ御大典ヲ挙行セラル

上荻野字東 撰文と筆者 村長三橋泰治郎 中荻野字子ノ神 金比羅社の鳥居脇 揮毫者

(参考)

『妻田行幸(紀元二千六百記念)』 昭和14年9月神奈川県教育會

○松永参謀の書簡(永野家に所蔵)

今般当地 行幸の儀に付御面談致度儀有之候間書記の内一名当宿まで御差出有之度此段申入候也 14年4月13日 近衛参謀 松永 大尉 愛甲郡役所あて 『妻田行幸』より

○宮内省侍従武官府記録要旨(『妻田行幸』より)

明治14年4月行幸ノ件 近衛師団ノ演習天覧為行幸被遊属従セル主ナル者左ノ如シ

伏見二品親王 北白川二親王 岩倉具視 山縣有朋 宮内大臣 侍従長以下侍従其他

演習ニ出場セル部隊及人員 近衛歩兵第二連隊・重砲兵第二大隊・野砲兵大隊・騎兵中隊・工兵中隊 合計 将校118人、下士335人 兵 2,144人



『明治天皇紀』 宮内庁編 (1968年から1977年に刊行)

(4月)28日、これより先近衛兵第2連隊・同騎兵3小隊・同砲兵大隊・同工兵中隊及近衛歩兵第一連隊一大隊をして、相模国愛甲郡荻野村・同愛名村付近に於て春季小演習を行はしめらる、23日演習を開始す…午前7時30分能久親王及び参議山縣有朋・宮内卿徳大寺實則・宮内少輔土方久元・侍従長米田虎雄・御練兵御用掛岡田善長・同大河内正質等を随えて御出門、8時15分汽車にて新橋を発したまふ、右大ら脊臣岩倉具視・宮内大輔杉七郎等奉送す、中略 近衛都督嘉彰親王用田村にて奉迎す。中略 相模川の仮橋を渡らせられ、午後7時10分愛甲郡妻田村に著御、行在所(永野茂の家)に入りたまふ、是の日終日雨やまず、泥濘深くして供奉の臣僚頗る困難せしが、迎拜の士女いたるところに群集せり、中略 是の夜嘉彰親王、天覧對抗演習の諸兵配置並びに地理等を奏聞す、

29日雨やみ漸く霽(はれ)る、午前5時起床したまふ、侍医例のごとく候せしが拝診を聴したまはず、8時30分騎馬にて妻田村行在所を発し、9時30分上荻野村字東の演習御覧所に著御、ついで荻野村字子ノ神の著御に移りたまふ、是の日の演習は、南軍諸隊を仮設敵とする北軍の攻撃演習にして、北軍は大磯に屯し、甲州街道を前進する南軍の背後を衝かんとす、南軍之れを探知し、兵を分かち北軍を口撃せんとし、進みて荻野村に到りて開戦するものとす、両軍奮戦数刻、南軍ついに力つきて敗走し、午後1時停戦の令下る、2時30分行在所に還幸す、中略 神奈川縣令野村靖・同縣書記官等天機を候す、仍りて謁(えつ)を賜う。中略

近衛兵の連合野外演習を始めて行はせらしは明治6年4月にして、下総國習志野原に幸して之れ行ひたまへり、ただし徴兵令実施後召集編制せられたる近衛諸兵の連合演習は、今次を以て嚆矢と為す、故に其の兵精、其の氣壯、殊に両軍の進退能く機宜に適し、就中砲銃発射の緩急に至りては實に間然する所なかりしと云ふ、酒肴料を将卒に賜ひて十時前行在所に還幸し、近衛都督嘉彰親王以下将校をを召して謁を賜ふ、又宮内卿をして、行幸に際し力を道路修理等に尽せるを嘉したまふ旨を、愛甲郡長・同郡書記、および厚木町・上荻野村外九箇村の各戸長・筆生等に伝へしめ、午後一時騎馬にて妻田村を発したまふ、嘉彰親王奉送して相模川畔に到る、4時20分藤沢に著御、

荻野での記録

○『妻田行幸』より

石井廣吉(安政6年生まれ) 荻野神社にて語る

陛下が御昼食を召し上がられるので、大釜へ湯を沸かす役を仰せ付かった、普通のものは近寄ること出来ないし金比羅様への参詣も一時交通止め、儼は特別で水を花上又七さんの家の井戸水を使用した。陛下の御食事を拝することは出来なかったが、陛下は御馬で御成り遊ばされ別に御乗換の白馬も用意されてあった、陛下御野立には青いテーブル掛けをかけたテーブルが一つ置いてあり 陛下は望遠鏡で演習の状況を御覧あそばれた、

○『明治・大正・昭和のふるさと荻野』 天利茂義(明治24年(1891)上荻野生れ)より 私のおふくろは明治元年(1868)生まれ、明治14年明治天皇がこられた時、妻田の永野邸へ花束を持って行ったという、袴をはいて新宿の辰巳屋の娘さんと一緒に。

○また明治 14 年当時上荻野村戸長の神崎正蔵邸(現神崎英男宅)には嘉彰親王の書「乾坤正氣天地皆春」が残されてる。東伏見宮(小松宮)の神崎邸訪問はこの演習後の 30 日以降と思われる。



⑨ 松田氏館跡 (荻野中学校)

織田信長や豊臣秀吉といった戦国大名が活躍した戦国時代に、私たちの住む関東地方は北条氏が支配していました。(鎌倉時代の北条氏と区別するため、後北条氏とも呼ばれます。)

後北条氏は初代伊勢盛時(北条早雲の名で知られています。)から 5 代 100 年にわたって関東に大きな勢力を持ち、最盛期には現在の伊豆から神奈川、東京、埼玉、群馬、千葉、茨城にかけて 250 万石の領地を持つ大大名でした。

そしてその後北条氏の家臣の中で、荻野の地を治めるのを任されたのが松田康長です。

康長は、戦場では主君の警護、伝令を、平時には事務の取次など役人として働く、馬廻衆という主君の側近集団の一員でした。

康長は 23 歳で荻野の領主となり、その後、軍事上の重要拠点だった荻野新宿には宿場が作られ、楽市(商人が自由に出入りし、店をひらくことができる。)が開かれました。松田康長の名前が書いてある当時の立て札は今でも残っていて、あつぎ郷土博物館で見ることができます。

北条氏は、領民の財産と生命を守り平和な社会を築くという願いを込めた「禄寿応穩」の家印を公文書に用い、日本史上最も低い税制をしいて善政を行いました。

しかし 1590 年豊臣秀吉の攻略によって、後北条氏は滅びました。

松田康長は箱根の山中にある山中城の城将を任されますが、山中城は土塁だけで作られた山城で、4 千の兵で守っていましたが、約 7 万の軍勢に攻められて康長も討ち死にしました。

康長の息子直長は、江戸時代になって徳川家康から元の領地の一部を与えられ、子孫は約 100 年にわたって荻野の地に住んでいました。

江戸時代末期にかかれた『新編相模国風土記稿』には、直長の住居跡は「上荻野村の西北の方角の畑の中にあり、今その跡形はない」と書いてありますが、昭和 46 年(1971)の神奈川



小田原駅西口の北条早雲像



山中城の障子堀



松石寺の松田家の墓

県埋蔵文化財遺跡地図には、荻野中学校の付近に城跡が記されており、翌年の『鳶尾遺跡第二次調査「聚落」』編集部の資料によると「現物の散布は少ないが、学校北側から北側の斜面部に至っている。学校内のゴミ焼却穴にV字坑（堀）が見られ、戦国末期の城跡と考えられる」とあります。

また、『厚木市埋蔵文化調査報告書第5集2002年』に、松田市兵衛直長館跡は、上荻野字山王山、鳶尾5丁目との記載があります。

（参考）松田市兵衛直長屋鋪址について（抜粋）

松田市兵衛直長 屋鋪址について

中村昌治

「新編相模風土記稿」の愛甲郡中荻野村のところに、「松田市兵衛直長屋鋪址」というのがある。鋪とは屋—家屋のこと、鋪は鋪又は館と書き館のことだから屋鋪で居館（やかた）と解してよからう。

風土記によると「西北の方陸田間にあり今其遺形なし」とある。これを高瀬慎吾先生にお聞きしたら「現在の厚木市立荻野中学校の所」と教えられた。機を得て実地踏査したところ、真にその時代こういう豪族の館を築くには格好な場所ということを実感し得た。

東は鳶尾山、西は華嚴山、北は館山の連嶺が馬蹄形に囲み、南方は開けて西部相模平野に接続している。館址は東の鳶尾山の西斜面の尾根俗称「ながおね」の突端に当る。館の外郭は荻野神社の西横から沢部落に行く旧県道を西辺とし、東南は土佐谷・道山谷、西北は山王谷、東北は堤谷で周囲を区劃されている。大手門は今の荻野小学校の校門の位置、櫓手は鳶尾山の方向、堤谷の上部に土塁の崩れ残りがありその切所に門の跡が

残る。館は荻野中学校々地、小字、天神原、館の前庭は荻野小学校々地、小字宮ノ越である。以前の地籍はこのあたりは大字中荻野になっていたが今は大字上荻野の最南部になっている。館址の南には荻野神社（旧称石神）、東の尾根に山ノ神、西の尾根に山王、北に天神、が館の四方の守護神であったのであろう。

館址に立つて四方を眺めると、前には仏果華嚴高取の山なみが迫り、その奥に丹沢阿夫利の連嶺、右手は土佐谷を隔て明治天皇天覧所の聖蹟、左は山王谷の向うの尾根には老人ホーム相模一望閣がある。また周囲の畑地のところどころに古墳の点在が認められる、絶好の環境である。しかしこのあたり一帯、目下、日本住宅公団の区劃整理区域になり測量が始まっているから、やがては面目一新の期が近いであろう、館址にしても今は新県道が横断して車の往来が頻繁なので大分以前の様相と違ってきた。

さてここに蟠居していた松田氏について風土記は「直長は兵衛大夫、助六郎と称す、康長の子、康長は北条氏に属し、永禄の頃（一五五八—一五八九）荻野郷を領す、役帳に所見あり」。参考—役帳を転記すると「松田助六郎—買得百七十七貫二百七十一文元、田中知行荻野郷此内百十四貫六十一文壬寅檢地増分」と記載がある。さらに「天正十八年豆州（伊豆）山中城（静岡県三島市山中にある）を守り上方勢と戦い討死す、直長遺跡を襲ぎ氏直に仕う、小田原落去の後、文禄四年（一五九五）召し

（以下略）

荻野神社 ほんでん 本殿 - はいでん 拝殿 (神奈川県指定重要文化財 平成26年3月28日指定)

主祭神は^{おおあなむちのみこと}大日貴命（別名は^{おおくにぬしのみこと}大国主命）で、副祭神に^{すさのおのみこと}素戔嗚命を^{ごうし}合祀しています。

21

とりい 鳥居

ここから先は神聖な場所です。鳥居は基本的に、二本の柱と二本の横木でできています。上にある横木を「笠木」、下にある横木を「貫」といいます。そして鳥居には、笠木の形によって、「神明系鳥居」と「明神系鳥居」の2種類があります。古代は二本の柱の間にしめ縄を渡したものだという説もあります。

こまいぬ 狛犬

神社の社殿の前などに守護・魔除けのため置かれます。

左右二体で一セットになって、お寺の仁王像と同じように口を開いている「阿形」と、口を閉じている「吽形」があります、左右の二体は、想像上の別々の動物です。

中国から鎌倉時代に日本に伝わったものは「唐獅子」と呼ばれています。神社境内に狛犬以外の動物の像があることもあります。例えば・ウシ・キツネ・ネズミ・などあります。

シカ 奈良県の春日大社などの神使としていられています。

お祭り

祭礼は60年に一度実施される大祭と毎年執り行われる例大祭があります。

大祭は、御神体である「自然石」の成長にあわせ、御神体の覆箱を少しずつ大きなものに掛け替える神事を行う際に御神意をお慰めするために始まったと伝わっています。

大祭は、干支の最初である甲子の年に始まり、60年ごとに行うことになっていました。しかし、慶応元年(1864)は麻疹の流行・尊皇攘夷と政情不安のため中止。政情が安定した明治9年(1876)丙子の年に再開。以後は丙子の年に行われています。

直近では昭和11年(1936)、平成8年(1996)に開催された。次回開催は2056年です。

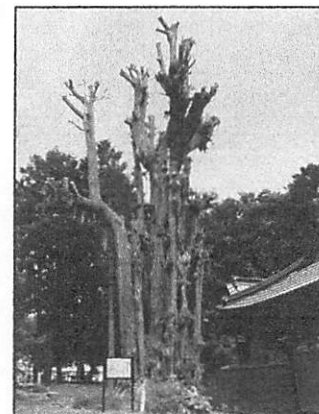
御神木

御神木の銀杏は樹齢600年とも推定されています。

昭和53年(1978)測定の幹回りは12・05mです。

境内にある他の大木

樹種	樹高 m	幹周り m	推定樹齢
ケヤキ	32	4.86	250
ヒノキ	27	8.58	200
カヤ	23	3.86	250



大イチョウ(御神木)

歌碑

柳田湘江・蟹殿洞々・大矢寛子・三栖一竹

- ・柳田湘江 「麦青き 風のそとなる 山の星」
- ・蟹殿洞々 「大空は 蓋も実もなし ほととぎす」

・大矢寛子 ^{ちよくだい} 勅題 あけぼの

「新はりの はたおこさんと ひと夜ねし こやにさし来る あけほののいろ」

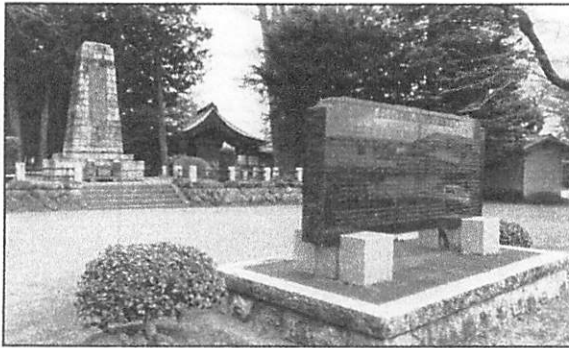
昭和22年(1947)の歌会始にこの歌を詠進、見事に詠進歌に選ばれました。

詠進とは詩歌をよんで朝廷や神社に献上すること。

・「郷社荻野神社」の社号碑左面に三栖一竹の句

「こちよく神に捧げる麦穂かな」

慰霊塔と平和の碑



左 慰霊塔

右 平和の碑

戦没者慰霊塔(昭和29年建碑)

平和の碑(昭和63年建碑)

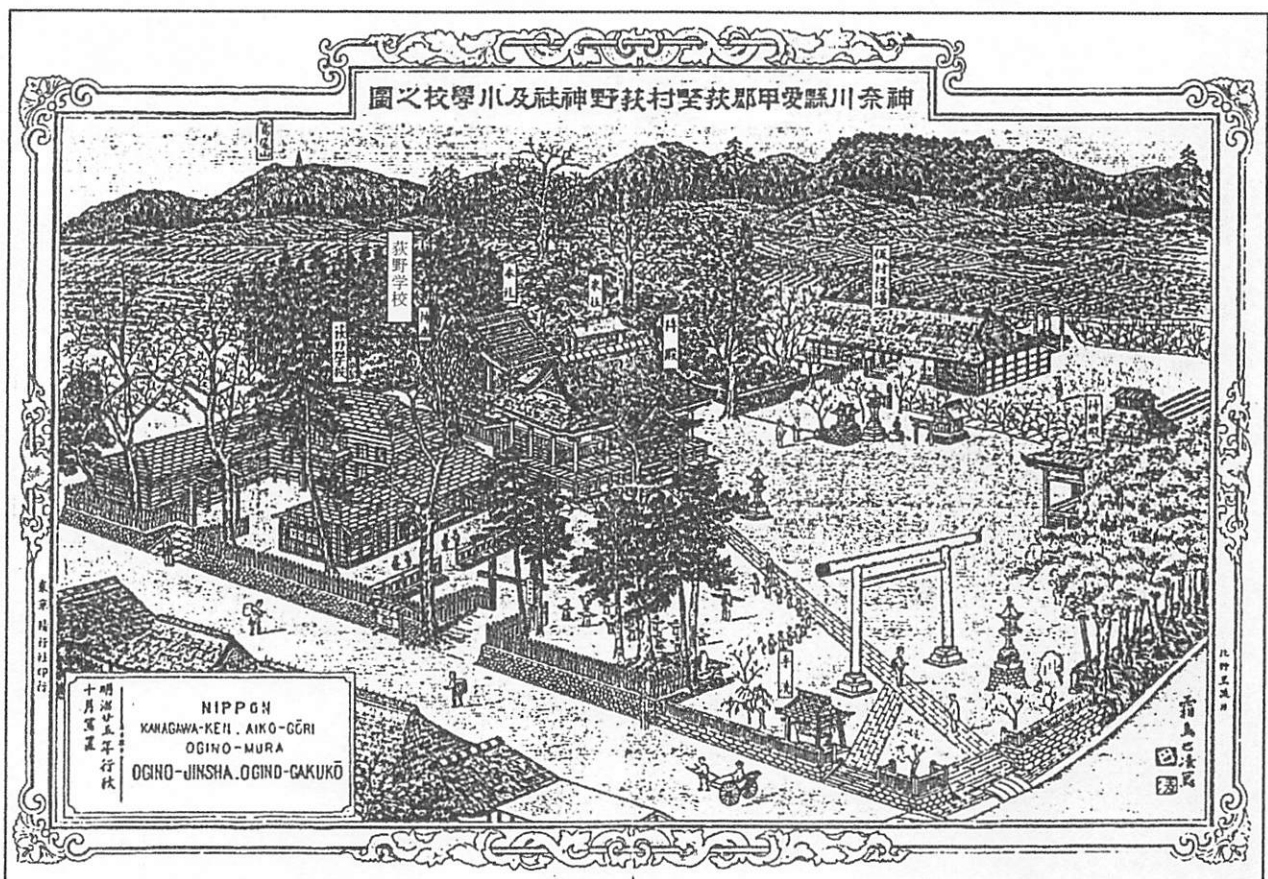
碑文

太平洋戦争が終り、我が国に平和が訪れてから既に四十余年の歳月が流れ去り、その惨害も復興と平和の陰にかくれて、遠く忘れ去られようとしている。世界は今、核戦争の脅威にさらされており、又、いずれかの国により戦争の惨状は繰返されている。苦しい戦争を体験し、辛うじて生還を得た者達が、再び繰返してはならない戦争の惨禍を根絶し、人類社会における輝かしい恒久平和が全世界を覆う日を希求し(後略)

裏側に建碑賛同者の名前

荻野小学校発祥の地

明治20年(1887)に荻野神社境内内に荻野小学校が創立されました。今年で創立してから138年になります。明治43年(1910)に隣接する現在の場所に新築移転しました。



(参考)「平和の碑」の賛同者の従軍体験記

手記『我が人生日誌』[戦争編] 曾根甚作より 抜粋

昭和13年(1938)兵役検査で甲種合格「一旦緩急有りし場合、戦場に散る」と決意し、昭和14年(1939)1月9日早朝荻野神社に武運長久を祈願し、10日甲府49連隊に入隊、翌日同村先輩が2人の上等兵より凄いいんたを受ける。5月初め出動、此の間父の死亡のときも会うこともできず。芝浦港より関門海峡、東シナ海を経て、約一週間で中国山東半島の港青島に、この地の行軍で夏は、日射病で倒れ、冬は零下15度で軍靴が凍てつく寒さ。敵正規軍が我々を迎撃数発の手榴弾を見舞われ臀部数か所弾の破片を受け野戦病院に入院、同郷の知人も負傷一時入院。

昭和15年(1940)東昌にて、八路軍より一等兵と軍曹が攻撃され小銃軍曹が攻撃され小銃にて共に腹部に銃弾を受け死亡、東昌の町の西門を警備、東門には公所出身の一等兵が来ていた。

またこの町には公認の兵隊の慰安所が3軒、一軒は日本人皆九州出身の20歳代、一軒は朝鮮人、一軒は支那姑娘各5、6名づつ居て、兵隊のサービスに奮戦、各隊の外出日一緒のとき又大変。慰安所の廻りには何十人もの兵隊が列を作り、順番を待っている。笑い話ではない事実の話である。

安楽鎮部落での戦闘、敵八路軍は四列縦隊で行進、我々小隊は軽機関銃2挺にて猛射撃を加える。激戦は深夜まで、翌朝夜明けに戦果調査、敵兵発見猛攻を加えた地点に5、6歳の女の子、生後幾月でも無い子供の死体を置き去る。戦争責任の全く無い子供達、他にも傷を負い逃げ去った子供も居たと想う。戦争の巻き添えをくった子供達、なんとも云えぬ戦争の惨めさ悲しみである。

陶県にて激戦と成る、敵は3階の望楼にたてこもり、我々を狙撃、分隊の上等兵が狙撃され負傷、敵に帰順を呼びかけても説得に応ぜず萬やむを得ず望楼に火を付けしが助けを求める敵兵おらず最期まで抗戦、一箇所七十数名の焼死体が、翌朝現地人を集め埋葬を行う。転戦帰隊作戦中にあった機関銃隊の市川君、七中隊の若杉さん共に同じ部落の親友、両名とも今は無き戦争犠牲者である。

昭和16年(1941)春、東昌東方40キロ地点敵八路軍に徐々に接近敵は兵力を増し、夕暮れに攻撃激しく。我が部隊後退、野砲隊は最後の手段の砲撃射撃を加える、喰うか喰えるかの最後の手段、少ない犠牲で済んだ。昭和16年晩春の東昌少隊の二年後輩の初年兵は、18年(1943)南方に転戦途中輸送船上敵機の爆撃魚雷を受け、二百十連隊は連隊長以下殆ど戦死全滅。

昭和17年(1942)に入り大東亜戦争の勃発で米機の空襲。其の敵機が中支南支の江西省方面に脱出着陸したとの情報が入る。杭州へは、東昌住民の見送り受け出発、杭州からの作戦は支那進駐の最大作戦と云われ当時16師団の部隊が参加、毎日の豪雨、大部隊の行動でまるで田んぼの中の行軍、新品の装備も泥沼で4、5日で軍靴の底が破れ、仕方なく民家に進(侵)入調達して身に着けるほかなし。行動開始忽ち食料の補給も途絶へて現地調達である。常山を攻略すべく周辺の山岳に入り、小生戦闘で少隊長に変(代)り指揮をとる、上等兵敵銃弾を受け心臓貫通で即死、玉山飛行場の破壊を目指し、玉山城に向かう入城直前煤ヶ谷出身の一等兵が狙撃され戦死、入城の直後第三分隊兵長銃撃を受け即死。玉山を攻略、飛行場の破壊に出動。炎天下40度、友軍飛行機により官給品投下されるが、雀の涙程度相変わらずの現地調達、毎日の食べ物に苦勞、及川出身の山田上等兵は軽機関銃班からの戦友調達の大豆で豆腐、納豆をつくり部隊に喜ばれた。

昭和17年10月玉山、常山を撤収、杭州から北支兗州に帰營、下旬に除隊のため甲府原隊に帰り11月1日付け原隊除隊と成る。除隊後相武台陸軍士官学校に勤務。戦況悪化、国土防衛隊が設けられ、中津飛行場に本部置かれ、敵機来襲の度出動、19年(1944)暮れ中津飛行場に勤務替え、とたん召集令状を受ける。

昭和20年(1945)2月1日川崎63部隊に応召入隊、その頃は敵機B29の来襲も激しく横浜、東京は既に大打撃を受ける。4月に入隊の初年兵約300名を下士官で引率、北支に転送の命を受け朝鮮經由北支濟南東方張店の衣部隊司令部に無事送り1ヶ月の兵輸送も終わり63部隊に帰隊する。直ちに歩兵学校に転任、学校では教導隊の内務長の命を受ける連隊長、新戦法の教育指導の要員となる。7月千葉市にB29の大爆撃で隣の鉄道連隊、気球連隊焼失、歩兵学校も三分の二を焼失、軍曹に昇進命令、学校内より新編成あり、すべて新品の兵器、服装を受ける。この時上層部は8月15日の終戦を知り得ていて、この編成は萬一国内軍隊の暴動を恐れその鎮圧部隊要員として編成されたことを後日知る。8月15日正午敗戦の詔勅あり、長き戦争も終止符。8月30日帰宅。

